

言葉の出ない日



田中三保子

その日は朝から上天気であったのに、私の気持の方はぼんやりとしたままだった。前からの問題を解決しようと思いを決して、前日、かなり長い時間電話でやりとりをした。予想をはるかに越えた不愉快な思いをしたあとに一応解決にはこぎつけたけれど、最初からけんかごしの相手では気持の落ちつけようもなかった。先方にこちらの思いが全く伝わらないので、精一杯こたばを尽くすことだけ続けたせいかな、翌日になってもまだ口をきく元気はおきてこなかった。果たしてきょう一日子どもたちと楽しく過ごせるかしらと、正直のところ心配であった。

「せんせい、おはようございます」「おはようござい

ます。」笑みを作って答えたものの、その第一声はかなりの努力を必要とした。それでも、登園してくる子どもたちと朝のあいさつをかわしているうち、だんだんいつもの調子に戻っていくのを自分では感じていた。

「せんせい、くまのお面作って」「あたしも」「ほくはワニのお面ね。」子どもたちが次々にお面を要求してきて、しばらく私は机に釘づけになる。その間にも園庭からは「せんせい、ごちそうができたよー」「せんせい、ぶらんこ押してー。」と声がかかる。ふさぎこんでいるわけではないので、ほんのちょっと努力をしさえすればからだは動いてくれる。けれども口の方

は依然重いままで、何としてもことばが出てこない。返事をしたい、しなくては思っても声にならない。しかたがないので目だけで「わかったわ」と応える。「せんせー、はやく作ってよ。」「ほくのお面できた？」砂場で遊び始めた子どもたちの身仕度をしてあげたり、ごちそうを食べさせてもらったり、ビニール袋を取りに行ったりと、私があちこち動くので、お面が欲しい子どもたちは、私にくっついて一緒に動きながら矢つぎばやに催促してくる。「この次ね。」「ごめんなさい。もう少し待ってね。」いくつかの要求にやっことばで返事をし、あとはせつせと手を動かすことと答える。「できたら教えてね。ぼく遊んでくるから。」私の調子がいつもと違うのを感じたのだろうか、Gはそういつて私のそばを離れた。ごめんなさいね、そういう気持で黙って目を見るときなずいてくれた。

ブランコを押して、Tを探しながら部屋に戻って中をのぞくと、すでにTは帰っていた。コップに水を入れては流しの手すりにこぼしかけている。あふれた水が床に水たまりを作っていた。急いで走りより、水をとめてコップを返してもらおう。みつかっちゃったという様にやにやしなから、ちらっと私を見る。その顔に「メッ」と言ってから、黙って床を拭く。そんなときいつもならさっとどこかへ行ってしまうTが、しおらしい様子で私を見、それから少し離れたところに立った。ことばで制されることも叱られることもなく、それが却ってこたえたのかいつになくしゅんとした様子に私の方が驚く。

びしょぬれのTの着がえをしていると、Mが砂だらけの手で庭の入口から私を呼んだ。急いでいって腕まくりをしハンカチをしまう。しばらくするとまた呼ばれる。「あそびたいの。」「えっ?」一瞬何のことかわからなかった。「私と?」これはことばにならず自分の胸を指さすと「うん」とMはうなずいた。Mがこんなことをいうのははじめてのことである。袋が欲しいとかお面を作ってくれといった要求をする時のほかは、あまり私のそばに来ない。そのMが私と遊びたいと言っている。逆光でMの表情は読みとりにくかったが、その気持はしっくりと私の中に浸みこんできたような気がした。昨日、登園するなり帰りたいと入口で泣き、その後私に人形やらボールやらを投げつけてきた

時のMの顔、いつまでもすねているのでさすがにむっ
として本気で怒ってしまった後のMの顔が思い出され
た。むかっとしてしまったことはどうにも気にかか
る。どうしてそんな気持になったのだろうか、そうな
る前に何とかできなかったかしら、など思い廻らして
いただけに、とても嬉しかった。残念なことに最後の
五分ほどしか砂場で一緒に遊べなかったが、「お帰り
だから片づけましょうね」と言うと、Mは素直に立ち
あがった。

子どもたちが帰ったあと、掃除をしながら、きょう
一日が思っていたよりは楽しい日であったことに気づ
いた。しゃべったことばの量はせいぜいいつもの半分
程度であつたらう。それなのに、いやそれだからこそ
却って気持が通じ合えたことも多かったように思われ
る。ということば、日頃はことばに頼る必要のないこ
とまでも口にしていたということになるのかもしれない。
あれこれとことばで伝えようとしてみても、それ
が子どもたちの心の中にしっかりと受けとめてもらえ
ないと思われることがしばしばある。なるべく要点だ

けにしようとか心がけていたつもりであったのに。でも
一方で、行為の一つ一つを承認したり、評価したり、
抑制したりするためのことばかけは子どもを伸ばして
いくために必要不可欠なものである。『きょうはず
い分上手に遊んだのね。』『ちゃんと探してみてもよかつ
たわね。』「とつてもきれいにしてくださったのね、あ
りがとう。』Aが我を張ることなく仲良く遊んでいる。
手にしていたものが見えなくなるとすぐ「なくなっ
ちゃった」と言ってくるM子が、一生懸命探している。
TとRがせつせとおままごとを片づけてくれている。
個々の行為に気づいていても、自分だけで納得して、
ともすると私はことばに出そうとしない。意識的にし
ゃべろうとする努力が度を越してしまっているのだろ
うか。どういうことばかけをしたら一番適切かと絶え
ず思い廻らしているために、見えていなかった部分
を、きょうははからずもしっかり受けとめることがで
きたのかもしれない。これから、あらためてそれらを
自身に問いかけていきたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)